

# 『三十三年の夢』の漢訳本『孫逸仙』について

寇 振鋒

## 1. はじめに

『三十三年の夢』は、宮崎滔天（1870～1922）といえれば必ず言及される代表的な作品である。最初は『二六新報』第 1066 号（1902 年 1 月 31 日）～1301 号（同年 6 月 14 日）までの毎期第一面に、計百二十三回にわたって連載された自叙伝である。『二六新報』の発行部数は十五万を超えていたことから、その当時、相当の数の読者がいたと考えられる。<sup>1)</sup> 連載完結の二ヶ月後の同年 8 月 20 日に、国光書房より単行本として発刊された。そして、わずか一ヶ月後の同年 9 月 25 日までに五版を重ねている。<sup>2)</sup> 同年 12 月 25 日には、すでに第八版に及んでいる。<sup>3)</sup> なお、吉野作造（1878～1933）によると、当時の日本で十版まで重ねた。<sup>4)</sup>

この作品について、内田魯庵（1868～1929）は「類い稀な天来の文学」と激賞し、<sup>5)</sup> 吉野作造は「人あり、若し私にその愛読書十種を挙げよと問ふものあらば、私は必ずその一として本書を数へることを忘れぬであらう。」<sup>6)</sup> と評価し、開高健（1930～1989）は、「あきらかに傑作である」<sup>7)</sup> と称賛し、辻潤（1884～1944）は「私は十八、九の頃それを読んで非常に感銘を深く受けた記憶があったので、もう一度繰り返して読みたくなったので買ってきたのだ。早速読み始めたところ再び新たな感興を覚えたので、僅か二日で読了してしまった。」「読了して私は思わず涙を催した程である。」<sup>8)</sup> と高く評価している。さらに一方、この作品は中国革命派に対する献身的な宮崎滔天型民権派「支那浪人」から遥かに遠ざかって、侵略的日本軍国主義の手先となった

駒井徳三（1885～1961）のような国権派「支那浪人」に与えた影響も少なくなかった。<sup>9)</sup> いずれにしても、『三十三年の夢』は日本においていかに多くの人に歓迎されたかということが想像できよう。

実際は日本だけに限らず、この作品はまた漢訳され、清末中国にも導入されるほど広まっていた。

『三十三年の夢』が単行本として発行された約一年余り後の1903年10月12日以降、清末中国において、黄中黄というペンネームを使った章士釗（1881～1973）によって『大革命家孫逸仙』（以下は『孫逸仙』と略す）という題名にして抄訳された。<sup>10)</sup> そして、三ヶ月も経たない翌1904年1月に上海国学社より公刊され、「金一」と署名した金松岑（1874～1947）による『三十三年落花夢』というもう一種の漢訳本もあった。<sup>11)</sup> 『三十三年の夢』漢訳本の総版数は原作を超えて、民国時代の1930年代まで少なくとも十九版まで刊行されたと見られる。

『三十三年の夢』は、日中両国においてほとんど、孫文研究の関係資料として歴史や思想の点からよく論じられているが、しかし清末中国における『三十三年の夢』の導入など一連の事実に関する研究はいまだに見られない。<sup>12)</sup>

清末中国においてこの『三十三年の夢』が政治宣伝の作品としていかに導入され、また、当時の政治宣伝にいかに影響を及ぼしたか、こうした一連の問題が解決すべき課題として残されている。本稿では、革命的文学作品という角度から、清末中国において『三十三年の夢』の初の漢訳本『孫逸仙』の導入状況について考察する。

## 2. 『孫逸仙』の訳者と翻訳動機について

『孫逸仙』は『三十三年の夢』の初の漢訳本である。『孫逸仙』の版本については、先に述べた1903年秋頃に刊行された初版『孫逸仙』と後述の1903年および1906年にそれぞれ発行された「蕩虜叢書」に収まった叢書版の二つの版の1900年代初めに刊行された三つの版が挙げられる。<sup>13)</sup> まず「黄中黄」という名を用いた訳者章士釗について簡単に紹介しよう。

章士釗、字は行巖、筆名は孤桐、秋桐らがある。湖南省長沙に生まれる。1902年3月、南京陸師学堂に入学し、1903年5月に上海に行っ

て『蘇報』の主筆となり、『蘇報』が閉鎖された三日後の1903年8月7日に、『国民日々報』を創刊した。この間に『三十三年の夢』の漢訳を始めた。1904年黄興（1874～1916）等が長沙で結成した華興会に参加し、長沙蜂起失敗によって日本に亡命した。

さて、まず章士釗が編訳した動機を探ってみよう。

第一に、章士釗はかつて、次のように上海愛国学社にいた時のことを回想している。

蔚丹（鄒容——寇注）がつねに談話に来る。談話は毎に深夜まで続き去らない。ある日私に突然聞いて言った。大兄（章太炎——寇注）は『驳康有為書』を作り、私は『革命軍』を作り、博泉（張継——寇注）は『無政府主義』を作り、貴方は何を作る？私は笑って謝意を表わしただけで終わった。<sup>14)</sup>

この回想によれば、当時、友人たちはそれぞれ革命を宣伝する作品を出した。しかし章士釗は類似の宣伝作品をまだ出していなかったため、鄒容（1885～1905）に求められていた。そこで、この時から鄒容の一言によって革命宣伝の作品を志すことが章士釗の念頭におかれたのであろう。ついに、同年の秋に待ち望んだ革命宣伝作品『孫逸仙』を刊行した。

第二に、章士釗は「疏黄帝魂」という長文中で次のように述べたことがある。

当時は国内の革命論はすでに次から次へと現れてくる。但し、この論（革命論——寇注）を孫先生に結びつけた人は極めて少ない。先生について私の知っていたことは、秦力山の言った海賊孫汝（孫文）と比べて、いくらか多くない。ある日、私は湖北の王侃叔（慕陶）の宅に暫らく居て、先生の手紙を見かけた。長さは数百言に達す。日本の美濃紙に書いたものである。筆跡は優れて立派で、私はとても驚いた。それから、敢えて草莽英雄を以って先生を見ることができなくなった。而して心底から敬服する気持ちが起きた。

章士釗は孫文（1866～1925）の手紙を見てからはじめて、革命と孫

文を結び付けた。もともと草莽英雄という印象にすぎなかった孫文は注目され、革命の英雄に一転した。つまり、孫文に対して心から承服し始めた。ただし、章士釗が孫文に対する承服の理由は孫文の抱負と方略のためである。なぜかという、章士釗は引き続き次のように言っている。

私は王侃叔によって先生の抱負と方略を知り、また滔天の前の壬寅年に発行された新著作を得て、一知半解の日本語知識（私はかつて江南陸師学堂で日文を習った）に基づいて、要所を選んで抄録し、この小冊子になった。<sup>15)</sup>

つまり、主な動機は孫文の革命的抱負と方略に感銘したためである。なお、江南陸師学堂において習った日本語はまた、章士釗の漢訳につながる不可欠な条件の一つとなったであろう。

第三に、章士釗は『孫逸仙』「自序」中で次のように述べている。

通紀（章士釗——寇注）は黄帝の子孫である。吾が黄帝の業に従えるものがあるとすれば、則ち性命の所在として見る。且つこのために意義を広め、天下に伝える。世間が私誼を以って相標榜することを見て、偽説を主張し、天下を惑わす者は、この書を読んで明白に知ることができる。<sup>16)</sup>

ここの「黄帝之業」とは満清政府を打倒する革命大業であると思われる。ここの「偽説」とは康有為（1858～1927）をはじめとする主張した改良思想の言論であろう。原作における、改良に反対し革命を主張する、および康有為を蔑み、孫文を称える思想は、訳者の思想と一致している。この書は革命思想を天下に宣伝できるし、改良派に対する戒めにもなるため、手本にすべきだと主張していると見られる。これも漢訳につながった要因の一つだと考えられる。

### 3. 『孫逸仙』の訳文について

以上は主に漢訳の動機について考察したが、次に漢訳上における関連事実を見ることにする。

原作と訳本を対照してみると、十七万字の原作は二万字の『孫逸仙』に抄訳された。しかし、章士釗は『孫逸仙』の漢訳において、『三十三年の夢』の体裁をまねている部分も見られる。

例えば、漢訳本には、原作の頭注、目次の形式を採っている。目次のところに示している、小見出しのような頭注の上につけた「◎」印も同様にまねている。<sup>17)</sup>

影印初版『孫逸仙』によると、原作『三十三年の夢』における 504 個の頭注は抄訳時に 68 個に省略された。なお、頭注の数について、事実として一言触れる必要がある。郭双林論文は『辛亥革命』第 1 冊所収の『孫逸仙』によったので 67 だと誤っている。<sup>18)</sup> その原因は、『辛亥革命』第 1 冊所収の『孫逸仙』版本においては、「孫君與滔天激談」「李鴻章謀挈兩広独立」という二つの頭注に間隔がなく、「孫君與滔天激談李鴻章謀挈兩広独立」一つの頭注に誤植されたためである。なお、『章士釗全集』所収の『孫逸仙』も同じく間違っている。

『三十三年の夢』は各章の見出しと考えられるタイトルがあるが、しかし回数が明記されてない。もし回数をつけるならば、二十八章から成ると考えられる。『孫逸仙』は章という形で段分けをして、明確に四章に分けている。本文の前には「章炳麟序」「自序」「秦序」「孫君原序」「滔天原自序」「凡例」「目次」があり、本文の最後には、劉光漢（劉師培）の「跋」がある。

漢訳本の語り手は原作の第一人称から第三人称に変わった。つ

まり、原作の語り手の第一人称「余」は、訳本『孫逸仙』第三人称の語り手「滔天」となった。

章士釗は「この書は原書の十分の四をとったにすぎない。また削減しているので、故に残ったのはいくらかもない。」<sup>19)</sup> と自認している。林啓彦は「全書五分之一に及ばない」<sup>20)</sup> と指摘し、なお、郭双林は「『孫逸仙』という書は『三十三年之夢』の後半〔第 17 節以後〕の孫中山の早年活動と関わった内容を選んだだけである。」<sup>21)</sup> と指摘している。いったい漢訳本は原作のどの部分を訳したのか、を明らかにしたい。そこで、この二つの作品の構成を対照してみよう。

『孫逸仙』	『三十三年の夢』
序（章炳麟直筆序） 自序（黄中黄） 秦序（秦力山）	
孫序（孫文）	支那孫逸仙拝序（孫文）
宮崎滔天原序	自序（宮崎滔天）
第 1 章「孫逸仙之略歴及其革命談」	第 17 章の大部分、第 16 章の二行
第 2 章「孫党與康党」	第 16 章最後の段落、第 18 章ほぼ全章、第 19 章の真ん中の部分
第 3 章「南洋之風雲與吾党之組」	第 20 章前の三行ぐらい、第 18 章第二、三、四段目、第 20 章ほぼ全章、第 21 章ほぼ全章
第 4 章「南征之變動及惠州事件」	第 22 章一段目、五段目からほぼ全章、第 23 章抄訳、第 24 章一部、第 25 章の一部、第 27 章ほぼ全章
跋（劉光漢）	

この枠の内容を対照して見れば、『孫逸仙』は原作の 28 章中の 12 章から抄訳されたと考えられる。作品の長さから見れば、五分の一に及ばないが、内容から言えば七分の三ぐらいが漢訳されたと思われる。もちろん、この七分の三でも全訳ではなく、抄訳、略訳が散在している。なお、郭双林論文における漢訳の章節に関する指摘は適切ではない。実際は、『孫逸仙』は第 17 章から訳し始めたのではなく、第 16 章から訳し始めている。

#### 4. 『孫逸仙』の位置づけについて

ほとんどの先行研究において『孫逸仙』は「孫文伝」に変身したと

指摘されている。<sup>22)</sup> 題名から見れば確かにそのように考えてしまうが、しかし果たして、「孫文伝」でなるのか、従来の見解を再検討する必要があると思われる。

第一 まず内容から見よう。『孫逸仙』中には、「孫逸仙」、「孫君」、「孫党」、「孫」、「孫先生」、「孫中山」など「孫文」を代表すると見られる言葉の出現の回数は合わせて約 110 回である。一方、「滔天」は孫文よりはるかに上回って 146 回に達している。この数字の差からも推測できよう。

第二 『孫逸仙』第 1 章においては、訳者章士釗によって加えられている約 1000 字の論説があるため、確かに孫文の事跡を主として述べられているように見えるが、しかし第 1 章以降の主な部分、例えば、新嘉坡の入獄、史堅如、康有為との関わり、惠州事件などの大部分は、ほとんど宮崎滔天か事件かをめぐる話である。孫文に触れた箇所がそれほど見られない。しかも、各事件の内容から見れば、宮崎滔天の自叙伝の跡が依然として見られる。

つまり、内容から見れば、『孫逸仙』は「孫文伝」との間に一定の距離があると考えられる。

第三 前の漢訳の動機にも述べたように、章士釗が孫文に感銘したのは、彼の抱負と方略である。しかも、漢訳の際にも、孫文との面識がなかった。<sup>23)</sup> また章士釗は「自序」中において、「孫逸仙というのは、一人の私号ではなく、新中国、新発見の名詞である。孫逸仙があつて、中国は始めて将来がある。」と記したうえで、引き続き、「<孫逸仙>を使って吾が物に名をつけて、たまたま孫逸仙になったにすぎない。」と述べている。つまり、「孫逸仙」を題名としただけで、個人の伝のためではないと考えられる。

第四 また章士釗は「凡例」中で、「この書が『孫逸仙』と標題するのは、吾が主義の所在に従い、なおまたそれが原書中の特別の主要なものであるためである。故にこの名に換え、それはよく合ったものである。」とするとおり、主義の視野から書名を付けたのである。さらに言えば、「孫逸仙」は主義の代名詞として章士釗によって考えられたのであろう。

以上のことから分かるように、その時、章士釗は孫文個人の業績を

称揚する、伝記を書くという計画で執筆したというよりも、むしろ友人の『駁康有為書』『革命軍』『無政府主義』のような革命的宣伝作品として編訳されたと考えられるべきであろう。

確かに、孫文の名は、『三十三年の夢』によって多くの日本人に知られた。しかも、漢訳本『孫逸仙』によって孫文は中国においても、ようやく革命者として広く認められるようになった。しかし、章士釗はもっぱら孫文伝であるように編訳しようとしたのではない。『孫逸仙』における宮崎滔天の事績は孫文の事績を上回っていたこともあり、宮崎滔天は当時の中国において人気を博していたのであろう。そのため、『孫逸仙』は単なる孫文伝というよりも、むしろ孫文と宮崎滔天二人の事跡がともに書かれている政治宣伝作品と言ったほうが適切である。

## 5. 『孫逸仙』の政治宣伝に見られる影響

清末中国における『三十三年の夢』の漢訳本は、基本的に『孫逸仙』と『三十三年落花夢』という二種類の訳本が取りあげられる。この二つの訳本はともに政治宣伝の視野から漢訳されたと考えられる。もちろんこの二つの訳本はともに、清朝政府統治下では禁書であった。さて、本稿では初の漢訳本『孫逸仙』の政治宣伝上の影響の軌跡を探っていききたい。

『孫逸仙』は、鄒容の『革命軍』（1903）、陳天華（1875～1905）の『猛回頭』（1904）、章太炎（1869～1936）の『駁康有為論革命書』（1903）、および『黄帝魂』（1903）などと並称された政治宣伝作品中の一種であった。『孫逸仙』を含むこれらの小冊子は、すべて同時期に発行され、「合わせて、その数はおよそ万を以て数える。店先での小売に応じる外に、郵送できるものには郵送、密かに送る必要があるものには、密かに送る。」「一時的に天下で流行し、みんなが先を争って読む。」<sup>24)</sup>という程度まで配布され、広まっていた。

1904年の革命組織である科学補習所が成立する前に、『孫逸仙』は政治宣伝作品の一種として配布されていた。張難先（1873～1968）は「科学補習所始末」中で次のように記している。

そこで、張難先、胡瑛は遂に工兵營（湖北陸軍第八鎮工程營——寇注）

に入り、兵士になって、二人は毎日兵士を説得し、『猛回頭』、『孫逸仙』、『黄帝魂』、『革命軍』などの書を配っていた。<sup>25)</sup>

こうした『孫逸仙』などは政治宣伝作品として使われ、当時多くの兵士の革命思想を啓蒙することができ、彼らを味方に引き入れた。

1904年11月下旬頃<sup>26)</sup>、黄興は湖南長沙での蜂起に失敗して日本に亡命し、他郷に窮した時、読んだ『三十三年の夢』の漢訳本を思い出して、中国革命を支持する著者宮崎滔天に身を投じた。このことは、吉野作造が自ら宮崎滔天と黄興二人に確認したという。<sup>27)</sup> 漢訳本の黄興への感化力がいかに強かったかは想像できる。さて、黄興の読んだ版本について、胡瑛が黄興の紹介で工兵營に入って『孫逸仙』を配布したことから見ると、『孫逸仙』である可能性が高い。さらに、「宮崎滔天氏之談」において、黄興との初対面について次のように述べている。

それ〔『三十三年の夢』——寇注〕を支那語に翻訳した奴がある。蔣ウゲン〔章行厳すなわち章士釗——原注。なお、「蔣」は「章」の誤植であろう——寇注〕と云ふ者が訳したのだが、原文よりも訳文の方がよい。原文は瓦の如く訳文は玉の如しとでも云ふ様なものであった。それを支那人は皆読んで居る。そこで留学生に来る奴で革命の志のある奴は、皆んな訪ねて来て居った。<sup>28)</sup>

以上によれば、黄興が目にしたのは『孫逸仙』であると推測できる。なお、孫文と黄興との提携ができたのも宮崎滔天の紹介のおかげである。その提携によってまもなく辛亥革命の推進母体である中国同盟会が誕生した。つまり、その糸を引いた媒介はやはり『三十三年の夢』であったと言えよう。

『孫逸仙』の宣伝効果が明らかに現れていた例もある。1905年9月24日、出国考察憲政の五大臣に爆弾を投げつけようとしたが、結局投げける前に爆発し、三人に軽傷を与えただけで、自身は爆死した当時の革命者吳樾（1878～1905）は、生前に『孫逸仙』などを読んだため、革命の思想に傾倒し一変したのである。「吳樾遺書・自序」中で、吳樾

はかつて次のように『孫逸仙』などの影響を語っている。

しばらくして某君がまた『清議報』を貸してくれた。最後まで読み終わらないうちに作者の主義がわが主義と化し、毎日立憲を言い、毎日立憲を望み、人にあえば、西太后が国をあやまり光緒帝は聖明であると言うようになった。(中略) またしばらくして『中国白話報』、『警鐘報』、『自由血』、『孫逸仙』、『新東方』、『新湖南』、『広長舌』、『愾書』、『警世鐘』、『近世中国秘史』、『黄帝魂』などの書を読み、そこで思想はまた一変し、主義はこれらの主張に追随した。そこではじめて以前の梁氏の説がほとんど自分を誤るところであったことを知った。<sup>29)</sup>

さて、『孫逸仙』中のどの部分が呉樾の思想に影響を与えたのか、を見てみよう。『孫逸仙』に記載されている史堅如(1879～1900)は、1900年惠州蜂起の際に、広東総督の徳寿を爆殺しようとしたが、しかし爆発が弱く、徳寿は軽傷を負ったにすぎなかった。結局、史堅如自身は捕えられ、処刑された。章士釗によって、宮崎滔天の『三十三年の夢』における史堅如の「大いに官人の心胆を寒からしめ」(第27章「惠州事件」による。漢訳文：大寒満奴之胆)というような英雄の壮挙に対する描写、叙述をほぼ漏れなく原作の順序通り『孫逸仙』第3章と第4章に漢訳されている。

以上から分かるように、呉樾の暗殺事件はまるで史堅如の事績の再演のようである。史堅如の身に現れる、理想主義のためにあえて自身を犠牲にする精神は、呉樾に対して影響があったと思われる。

なお、『孫逸仙』第1章中の六つの段落は単独で取り出され、「孫逸仙與白浪滔天之革命談」と題して革命を宣伝する『黄帝魂』誌にも掲載された。

またそれは、『孫逸仙』の発行同年にまた「蕩虜叢書」の第一種として刊行されたという。<sup>30)</sup>1906年にまた引き続き、「蕩虜叢書」の看板作品として刊行されていた。<sup>31)</sup>なお、「蕩虜叢書出版広告」は東京で発刊された月刊『民報』第10、11、12号(1906年12月30日、1907年1月25日、3月6日)にも掲載され、同じ東京で発刊された『漢幟』第1号(1907年1月25日、前身は1906年に東京で創刊した月刊『洞

庭波』)にも掲載されている。このことから、『孫逸仙』は当時日本に留学していた若者の間において、その影響の範囲の広さも想像できよう。

以上のような一連の事実から考え合わせると、『孫逸仙』は当時革命時期の中国においてその政治宣伝の役割を十分果たしたと考えられる。

『孫逸仙』によって、革命思想が同時代人の間で広がっていくとともに、孫文も「海賊」から「革命党首」に変わっていたのである。

## 6. おわりに

以上、『三十三年の夢』の初の漢訳本『孫逸仙』の導入状況、作品実態、およびその政治的影響について考察した。宮崎滔天は『孫逸仙』によって、多くの中国人の知るところとなったのである。そして、革命者としての孫文も『孫逸仙』によって知名度が一気に高くなった。タイトルから見れば、『孫逸仙』は確かに「孫文伝」のように思われがちであるが、しかし漢訳本『孫逸仙』は決して、訳者が「孫文伝」であることを目指して翻訳しようとしたものではなかった。そのため、本稿での考察によって、従来の『孫逸仙』が「孫文伝」であるという説を覆すことができた。そして、先行研究における訳文上の指摘には誤りがあったことも明らかになった。

なお、『三十三年の夢』は広義に言えば、政治小説の特性をもっている。そのため、『孫逸仙』は、政治宣伝の視野から漢訳されたのである。しかも、『孫逸仙』は当時の清末中国において革命を宣伝するための政治的影響力が相当強かった。呉樾の暗殺事件から見れば、『孫逸仙』が当時の中国の革命者の間において果たした役割が大きいことは言うまでもない。

『孫逸仙』は完訳本ではないが、しかし政治宣伝の分野に限らず、文学の分野に及ぼした影響力も過小評価してはならない。『三十三年の夢』は清末中国に導入された明治の文学において、政治、文学二つの分野に対して、強く影響を及ぼした、最も重要な一作品である。今後は、『三十三年の夢』のもう一つの漢訳本『三十三年落花夢』の導入状況、および清末政治小説における『三十三年の夢』の受容について考察していくつもりである。

\*本稿は2007年3月に名古屋大学に提出した博士学位論文『清末政治小説における明治政治小説の導入と受容——日中近代文学交流の一側面——』の第五章をもとに加筆修正を施したものである。

## 注

- 1) 島田虔次「三十三年の夢・解題」『宮崎滔天全集』第1巻、1971年7月p613。なお、『三十三年の夢』の命名については、中国辛亥革命志士田桐が次のように記述している。「三十三年、何謂也？余曾此問宮崎。宮崎曰：生平受苦、無逾此年、恰当余年三十三歳、又明治三十三年、故以三十三年之夢名」（『太平雜誌』第1巻第2期1929年11月）。
- 2) 西田勝「支那革命軍談・解説」宮崎滔天著『支那革命軍談』法政大学出版局、1967年9月。
- 3) 前掲島田虔次「三十三年の夢・解題」。
- 4) 吉野作造「三十三年の夢・解題」初出『帝国大学新聞』第168～170号、題名「『三十三年の夢』——その再刻について」1926年5月。底本は宮崎滔天著、宮崎龍介、衛藤藩吉校注『三十三年の夢』（平凡社1967年10月）所収による。
- 5) 坂上信八郎「大陸への出発：武田範之をめぐって」判沢弘編『アジアへの夢』明治の群像6、三一書房、1970年9月。
- 6) 前掲吉野作造「三十三年の夢・解題」。文章はまた次のように褒めている。「数奇風流の運命に身をまかせた人だけに、著者三十年の行事そのものが既に非常に面白い。それにその文章がまたすてきだ。単純な読みものとしても人をして巻を措く能はざらしむるだけの魅力あることは私にも保証ができる。是れ創刊の当時大に洛陽の紙価を貴からしめた所為であらう。」
- 7) 開高健「孫文その悲惨と栄光」『中央公論』第78年5号、1963年5月、底本は『開高健全集』第10巻（新潮社、1992年9月）による。
- 8) 辻潤「宮崎滔天を憶う」初出『子子以前』昭森社1936年5月。底本は『辻潤全集』第3巻（五月書房1982年8月）による。
- 9) 杉森正弥「支那浪人」宮崎滔天のイメージ——「三十三年之夢」のころ『語学文学』10、1972年3月。

- 10) この初版の発行時間について、呉相湘「大革命家孫逸仙〔影印本〕前言」（呉相湘主編『中國現代史料叢書』第1輯、黄中黄著『大革命家孫逸仙』文星書店影印本 1962年6月。ちなみに、本稿はこれを底本とする。）によると、この初版の印刷発行は1903年の秋だと推定されている。なお、秦力山の序の日付は西暦1903年10月12日なので、公刊時間は同年10月12日以後の秋だと推測すれば適切だと考えられる。
- 11) この発行時間については、ほとんどの日中両国の研究者は『孫逸仙』と同じ年に刊行されたと指摘している。例えば、林啓彦「写在『三十三年之夢』中訳本前面」（宮崎滔天原著、佚名初訳、林啓彦改訳・注釈『三十三年之夢』花城出版社1981年8月）、「孫逸仙・編者注」（章含之、白吉庵主編『章士釗全集』第1巻、中華書局、2000年2月）、島田虔次「『三十三年の夢』あとがき」（『隠者の尊重：中国の歴史哲学』筑摩書房1997年10月。初出『三十三年の夢』岩波書房1993年5月）、芦益平「アジア民主革命の先駆者・宮崎滔天——辛亥革命九十周年のために」（『社会文化研究所紀要』第48号、2001年7月）、山室信一「宮崎滔天『三十三年之夢』」（『文字』終刊号2006年3月）などがある。その指摘は適切ではないと思う。その理由は、『三十三年の夢』の刊行時間は旧暦で言えば1903年11月25日で、もし西暦の場合は1904年1月12日である。そのため、旧暦か西暦か言わない前提の下で「同じ年」を言うと不当だと思われるからである。
- 12) 郭双林「試論章士釗編訳的『孫逸仙』在清末革命宣傳中的地位和作用」（『河南大学学报』（社会科学版）第40巻第2期、2000年3月、この論文は史学の角度から翻訳と宣傳を論じている。
- 13) なお、第二次世界大戦後、1962年6月に呉相湘主編『中國現代史料叢書』第1輯として文星書店より刊行された影印本がある。そして、『辛亥革命』第1冊（上海人民出版社1957年7月）、と『章士釗全集』第1巻（中華書局2000年2月）にも収められている。
- 14) 章士釗「孤桐雜記」『甲寅週刊』第1巻第4号、1925年8月8日、底本は『章士釗全集』第5巻（2000年2月所収）による。
- 15) 章士釗「疏黄帝魂」『辛亥革命回憶録』第1集、中華書局、1961年10月。底本は『章士釗全集』8巻（中華書局、2000年2月）所収による。
- 16) 章士釗「孫逸仙・自序」文星書店影印本。
- 17) 底本は、日本図書センターより発行された、1902年に国光書房より刊行された単行本を底本とした『宮崎滔天：三十三年の夢』による。
- 18) 前掲郭双林論文。

- 19) 章士釗「孫逸仙・凡例」文星書店影印本。
- 20) 前掲林啓彦「写在《三十三年之夢》中訳本前面」。
- 21) 前掲郭双林論文。
- 22) 例えば、島田虔次「三十三年の夢・解題」(『宮崎滔天全集』第1巻 p 615) と古江研也「宮崎滔天『三十三年の夢』論」(『国文学年次別論文集近代』4 (昭和 60 年)、1987 年 7 月。初出『方位』第 9 号、1985 年 12 月) はともに「孫文伝」に変身されたと指摘している。そして、「孫中山の早期革命闘争史」(前掲郭双林論文) との指摘も同様であろう。
- 23) 章士釗「孤桐雜記」『甲寅周報』第 1 巻第 4 号、1925 年 8 月 8 日。底本は『章士釗全集』第 5 巻 (2000 年 2 月) による。
- 24) 章士釗「疏黄帝魂」初出『辛亥革命回憶録』第 1 集、1961 年 10 月。底本は『章士釗全集』第 8 巻。
- 25) 張難先「科学補習所始末」前掲『辛亥革命』第 1 冊 p547。なお、歐陽瑞驊が「武昌科学補習所革命運動始末記」中で(同『辛亥革命』第 1 冊所収 p 553) 同じく振り返っている。
- 26) 「宮崎滔天年譜」(宮崎龍介・小野川秀美編『宮崎滔天全集』第 5 巻 平凡社、1976 年 8 月) によると、「11 月下旬? 黄興、広市場亭樂屋に來訪」と記されている。
- 27) 前掲吉野作造「三十三年の夢・解題」。
- 28) 「宮崎滔天氏之談」前掲『宮崎滔天全集』第 4 巻 (1973 年 11 月) p299。
- 29) 「吳樾遺書・自序」『民報』臨時増刊『天討』、1907 年 4 月 25 日。訳文は近藤邦康抄訳「暗殺時代」(西順蔵編『原典中国近代思想史・辛亥革命』岩波書店 1977 年 2 月) による。なお、『自由血』は金松岑が煙山專太郎『近世無政府主義』によって訳されたのである。『広長舌』は幸徳秋水の漢訳本である。
- 30) 前掲郭双林論文。
- 31) 叢書は、第 1 種『孫逸仙』、第 2 種『瀋荇』、第 3 種『無政府主義』、第 4 種『吳樾』四種からなる。